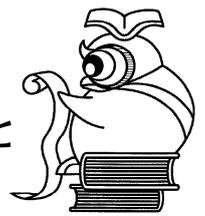


ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第47号 (2008年10月)

インターネットと資料と
レポートの正しい関係



インターネットを通じた 資料との出会い

河島 茂生

レポートとインターネットとの関係を考えるとき、しばしば否定的な側面ばかりが着目される。しかし、現代社会において、インターネットを使わなければ、ネット上の情報だけでなく、書籍へのアクセスにかんしても大きな制限がかかってしまう。いやむしろ、著作権に留意して使えば、インターネットは、強力な「思考のための道具」(H. ラインゴールド) として機能すると思われる。

図書館およびその学たる図書館情報学は、人々の資料収集を手助けするため、数々の手法を編み出してきた。資料の配置方法から蔵書目録の手法まで、その方法は数え知れない。

インターネットが登場し普及することによって、これまでの資料収集をサポートする手法が効率化した。しかし、それだけでなく、新たな方法が生まれることにもなった。「電子図書館」や「全文検索(フルテキスト検索)」は、その代表的な例である。

電子図書館は、文献の書誌データだけにとどまらず、資料それ自体もデジタルデータで提供する。利用者は、コンピュータの前に座って操作すれば、いろいろな電子化された資料を手に入れることができる。近年話題になっている「機関リポジトリ」も、電子図書館の一つである。機関リポジトリとは、一言でいえば、研究機関がその知的生産物をデジタルデータで提供するシステムであるが、おそらくこの図書館報も、聖学院大学の機関リポジトリに収録されるだろう。電子図書館では、簡単なエッセイから難解な学術論文まで、さまざまな資料を得ることが可能であり、レポート作成の参考にすることができる。

全文検索とは、資料内容の全文をデータベースに入れ検索可能にすることを指す。たとえば、有名な検索エンジン「Google」の検索技術それ自体も全文検索を採用しているが、本との関係でい

ば、「Google ブック検索」がそれに当たる。Google ブック検索は、インターネットで書籍の中身に含まれるデータを検索できる仕組みである。あらかじめ書籍の本文をスキャンしてデータベースに格納し、検索語に合致する文字列が本文にあればその書籍を検索結果として示すメカニズムである。たとえば「聖学院」と打ち込めば、本文中に聖学院という語が見られる書籍が検出されることになる。

いうまでもなく、全文検索は、表記の揺れに弱く検索漏れが生じやすい。というのも、全文検索は、日常で使われる言葉をそのまま検索対象にしているからである。日常で使われる言葉は、同一の概念であっても違った表現がなされることが稀ではない。「古本屋」にかんする資料であるにもかかわらず、著者によって「古書店」と表記されたり「古書商」と表記されたり、表現がちがってくる。そうしたばあい、古本屋という言葉で検索を実行したとしても、著者が古書店もしくは古書商という語を使っている資料は、検索に引っかからない。検索漏れが生じてしまうのである。

とはいえ、全文検索は、いままでにないかたちで資料と利用者が結びつく契機を作り出しているといえよう。なぜなら、資料の全文を検索対象とする手法がこれまでなく、思いがけない資料が抽出されてくることがあるからである。全文検索では、ほんの少しその語が資料に入っているだけでも、該当する資料として抽出される。利用者は、全文検索の短所を念頭に置いたうえで、資料収集の一方策として用いることが期待される。

インターネットによる資料収集の新たな方策を2つ紹介してきた。電子図書館は、紙媒体でも見られる資料がインターネット上で利用できる手法である。全文検索は、紙媒体へのアクセスを前例にないかたちで可能にした手法である。

インターネットは、資料と人との新たな出会いを生み出しつつある。レポート作成の補助線として活用するとよいだろう。

(政治経済学科 特任講師)

教員からみたレポートの インターネット利用について

—法律・情報倫理の観点から—

渡辺 英人

大学生にとって一番重要な情報収集の手段は、図書館で「文献」を探し、丹念に読む、ことである。私が大学生であった1980年代は、図書館の情報化、すなわち図書館業務のコンピュータ化が進む、まさに移行期であったため、図書館で文献を探す主たる手段は、著者名、書名、件名、請求記号順に分かれた五十音順、ABC順の「カードボックス」に並んだほぼハガキ大の「文献情報カード」を丹念にめぐり、目的の文献情報を発見したら、図書請求記号を用紙に記入して図書館員に学生証といっしょに手渡しすると、文献が図書館の奥から出てくる、というものであった。借り出した図書は開館時間から閉館時間までの当日限りの利用許可であったため、時間内に必死に読み終え、ノートに書き写すか、一枚10円のコピーを利用したものである。しかし、現在ではインターネットの普及に伴い、従来からの「重要な情報収集手段」である「文献」に加えて、インターネット上での情報検索もまた、「重要な情報収集手段」として誰からも認められている。かつての大学生たちの「居場所」が図書館書架中心であったものが「パソコン利用室」に移動した形になった。

インターネットの普及は1990年代以降、まずは大学や企業から、その後、家庭内にもその利用が広がってきた。総務省の「情報通信白書（平成20年版）」によると、パソコンの保有率は、最も高い地域とされる北陸地方で人口比94.1%、最も低い四国地方では72.8%（平成19年）。これに対して、インターネットの利用率は、北陸地方で96.0%、最も低い四国地方で81.6%である。ちなみにインターネットと時を同じくして普及した「携帯電話」等の保有率は、やはり最も高いとされる地域は北陸地方で99.4%、最も低い地域の四国地方でも89.8%とのことである。すなわちほとんどすべての人がパソコンを利用し、パソコンを利用する人のほとんどがいずれかの場所でインターネットを利用している、と言える時代になったのである。

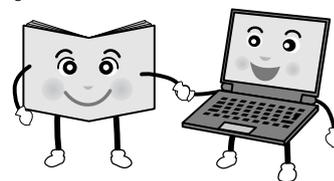
「情報を探し、手に入れる」ために、かつての大学生たちは図書館内のみならずあらゆる場所を、情報源を求めて、歩き回らなければならなかった。しかしインターネットの普及は状況を一変させた。インターネットに接続されたパソコンの前に座れば、世界中のありとあらゆる情報にアクセスし、これを入手。簡単に情報を印刷し、あるいは記憶媒体に記録し保持することができるのである。これに伴い、いま問題となっているのが、インターネット上で見つけた情報の「コピー（複製）・アンド・ペースト（貼付）」、通称「コピペ」である。学生たちに課した課題のレポートを回収すると、多くの学生たちのレポートの文書表現がきわめてよく似ている。全く同じ、ということも珍しくはない。Google（グーグル）をはじめとする、検索サイトを利用して、課題レポートの題に関するキーワードを入力。検索結果の上位にあったホームページから、レポート題に合う文書を見つけて、コピー・アンド・ペーストすれば課題が完成する、という方法である。つい最近、NHKの情報番組「クローズアップ現代」の中で「コピペ」防止を目的に、学生たちのレポートを、インターネット上の情報源と比較して、何パーセントくらい同一であるかをチェックするソフトウェアを大学で開発した、というニュースを報道していた。これを観たときに、かつての大学生と、昨今の大学生との間に、どのような違いがあるのだろうかと考えてみた。かつての大学生たちだって、図書館で良い資料を見つけると、これを丹念に読み、「これは、」と思う文書をレポートに書き写していた。かつての大学生たちだって「コピペ」を使ってレポートを書いていたのである。ただ違いがあるとすれば、書く手間、入力する手間を必要としたことぐらいではないだろうか。

私は「コピペ」に反対しない。何ごとともはじめは「まねる」ことから始めるからである。「コピペ」が悪いと考えるのであれば、大学生たちに、著作権をはじめとする「知的財産権」についてしっかりと学ぶ機会を与えることと、「自分の言葉」で発言、発信することがいかに重要であり、大学を卒業した後、職業人として社会で力強く生きていくための手段である、ということ教えることこそが重要なのである。

（コミュニティ政策学科 准教授）

インターネットと資料とレポート 実践編

「調べ物なんてインターネットで十分」、「レポートって調べたことをまとめればいいんでしょ?」と思っている方はいませんか。ちょっと待ってください。インターネットでも資料でも情報の扱い方には押さえておきたいポイントがあります。



まずは情報収集

インターネットは信頼できるの?

Web ページなどの情報は、図書や雑誌論文などの印刷物と違い、編集者のチェックなど客観的な評価を得ていないものが多いです。そこで Web 情報は以下の点に気をつけて利用しましょう。

- 著者は誰か? : 一般的には個人管理のページより機関 (国、官公庁、学会など) が作成したページの方が、信頼性が高いと考えられます。
- 何の目的で誰に向けて発信されたのか?
- 常に更新されているか? : 情報の作成日や更新日を確認しましょう。頻繁にメンテナンスされている Web ページは情報が新しく信頼性が高いです。

リンクを賢く使おう!

信頼できるサイトのリンク集は、頼りになるサイトにつながっている確立が高いです。

具体的には…大学→学科→ゼミ→ゼミの先生→先生おすすめのデータベース→先生の研究仲間…こうして「類は友を呼ぶ!」のです。リンクをたどって、ネットの海へ漕ぎ出していけば、遭難することなく目的地までたどりつけることでしょ。

検索のポイント

キーワード

自分がどのような情報が必要なのか考え、関連したキーワードを「単語ごと」に区切って入力しましょう。類義語・同義語でも試してみましょう。

詳細検索を利用しよう

一般的に単語と記号を組み合わせる事で色々な検索ができます。主な検索方法はつぎのとおり。

AND 検索 : 入力した総ての語を含む情報を検索します。多くのデータベースは、語をスペースで区切るだけで自動的にこの検索になります。

OR 検索 : 入力したキーワードの内、いずれかが含まれた情報を検索します。同義語・類義語を並べると効果的です。

NOT 検索 : 入力した検索結果から余分な情報を除きたいときに利用します。

もっと限定的に調べたいときには、各データベースの詳細検索やオプション検索を利用しましょう。データベースごとにできることには違いがありますので、ヘルプなどを参照してください。

本も役立つ

インターネットでうまく見つけられず手こずった情報が、辞書、事典、年鑑といったレファレンスブックを開くことで簡単に出てくる事があります。テーマにそった事柄について、様々な角度から深く、または広く情報がつめこまれているのが専門書といわれる本です。図書館に足を運び、インターネット検索と同時に、すぐ横にある本からもアプローチしてみましょう。

レポートを書く!

他人の文章と、自分の文章は区別して

他人の文章を文中で紹介することを「引用」といいます。引用と分かるようにしましょう。

- 短い文章のとき…「 」で挟んで文中に挿入し、文章の後ろに小さく番号を振ります。
- 長い文章のとき…一行をあけて、段下げをして文章を、その後ろに小さく番号を振ります。さらに、番号にそって引用文献リストで出典を明らかにしなくてははいけません。

他人の文書を勝手に改変しない

他人の文章を自分の文章のように直して使う、また区別ができない書き方をすることを「盗用」といいます。盗用は罰せられます。

文献リストの書き方

文献リストには書き方の約束があります。

- A. 図書の場合 : 著者名『書名』, 出版社名, 出版年, 引用ページ, (シリーズ名).
- B. 雑誌論文の場合 : 著者名「論文名」, 『雑誌名』, 巻・号, 発行年, 引用ページ.

- C. 新聞記事の場合：記事名・発行年／月／日／曜日・新聞名・朝夕刊・版数(頁数)：引用段。
 D. Web ページの場合：サイトの運営主体・情報テーマ・(サイト URL)・情報入手日。
 ※正式な決まりはまだありませんが、必ず、情報入手日(最終アクセス日)を書きましょう。

最後にもっと詳しく知りたい方に…

論文作成については、図書館3階書架816.5の棚に関係資料が並んでいます。例えば…

- 小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』, 講談社, 2002.
- 榎木伸明『卒論を書こう』, 三修社, 2006.
情報についての資料は、図書館2階書架007.5, 007.6の棚に並んでいます。例えば…
- 小波秀雄『きわめる情報リテラシー』増補改訂版, 晃洋書房, 2007.
- 伊藤民雄『インターネットで文献探索』2007年版, 日本図書館協会, 2007.
3階視聴覚資料コーナーには関連の映像資料もあります。例えば…
- 『レポート・論文作成法』, 紀伊國屋書店, 2002, (新・図書館の達人6)。

図書館からのお知らせ

- ▶ 1階のコピー機がカラーコピー機になりました。白黒とカラーでは使用料金が異なります。利用する前に必ず選択・確認してください。
- ▶ 図書館2階閲覧席の椅子が新しくなりました。閲覧室の雰囲気もちょっと変わりました。一度、すわり心地を試しにきてください。

イベント案内

「図書館と県民のつどい埼玉2008」

埼玉県立図書館協会と埼玉県教育委員会が主催する「図書館と県民のつどい埼玉2008～図書館で未来を開こう！～」に、聖学院大学の図書館も参加することになりました。これは、県内の公共図書館を中心に、高校図書館、大学図書館がそれぞれの活動や資料を紹介するイベントです。

日時 2008年11月1日(土)10時～15時30分

会場 第1会場 さいたま市民会館うらわ
 第2会場 浦和コミュニティセンター
 (浦和パルコ/コムナーレ10階)

※大学は第2会場です。

URL https://www.lib.pref.saitama.jp/stplib_doc/tsudoi2008/index.html

聖学院大学の機関リポジトリ「SERVE」(サーブ)がスタート

今年10月、聖学院大学に誕生した新しいシステム「SERVE」を紹介します。

Q1 機関リポジトリってなに？

大学などの研究機関が、所属する研究者の研究や教育の成果を電子的に保存・蓄積・提供するシステムのことです。

Q2 「SERVE」って？

聖学院大学に所属される先生方や院生の研究成果などを収集して保存し、インターネット上に発信する仕組みをつくりました。その名前が「SERVE」(SEigakuin Repository for academic archiVE)です。

また「SERVE」の名前は本学の建学精神である「神を仰ぎ人に仕う(Love God and Serve His People)」に通じています。

Q3 どんなものが入っているの？

先生方が書かれた論文や研究発表の資料、大学で開催された行事のパンフレットやポスターなど聖学院に関連する資料です。

Q4 誰でも見られるの？

はい。登録されている資料のデータはインターネット上で誰でも見られます。また本文情報(実際の論文や資料)も見られるので電子図書館としても利用できます。

Q5 誰でも登録できるの？

原則は、本学に所属している研究者(先生方や大学院生など)の方です。ただし、本学の学生の方でも、内容によっては、登録できます。研究成果をインターネット上に発表したいと思ったら、図書館に相談してみてください。

Q6 「SERVE」のアドレスは？

URL <http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/>
 どうぞご利用ください。

発行・編集 聖学院大学総合図書館
 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号
 電話 048-725-5461 FAX 048-780-1096
 E-mail lib@seigakuin-univ.ac.jp
 URL <http://seiglib.seigakuin-univ.ac.jp/>